

船霊信仰の比較文化論—日本・タイ・ミャンマー—

関 泰子

— 目 次 —

1. はじめに
 2. 船霊信仰とは
 3. タイにおけるメー・ヤー・ナーン（船霊）信仰
 4. ミャンマー東南部における船霊信仰
- 結論

1. はじめに

本論文では、船を守る神としての「船霊」⁽¹⁾信仰を取り上げ、日本、タイ、ミャンマーにおける船霊信仰の共通性について考察した後、近代における「精霊信仰」のナショナリズムとも言うべき個別化について論じる。

東南アジアは現代においても、精霊信仰実践の盛んな地域である。タイ、ミャンマーはそれぞれ、その代表的な事例として、研究の蓄積がなされてきた。それに対し筆者は、一国の一地域に限定されてきた研究ではなく、「文化圏」としての広がりの中での研究の必要性を提起してきた⁽²⁾。

通常、タイ農村の精霊信仰における「異界」は森である。森の消失、仏教の浸透による森の守護霊信仰の衰退は、精霊信仰の衰退と変容とみなされてきた。しかし、「海」という「異界」は、消失することはない。いつの時代も漁民、船乗りにとっては厳然とした「異界」として横たわる。漁民に豊穡をもたらすが、他方で常に遭難の危険と隣り合わせの「海」に頼る生活は、漁民を「迷信深く」さ

SEKI, Hiroko 四国学院大学社会学部 教授、東南アジア社会研究

せる。様々な精霊に彩られた陸地と切り離された漁民が頼るのは「メー・ヤー・ナーン（船霊）」である。また、同様な信仰は、ミャンマー沿岸部の漁民にも見られる。ミャンマーではエイヤーワディー川流域とアンダマン海沿岸では、船霊の名称や性別が異なることは、以前の論文で述べた。

船を守る霊的な存在は、アジア地域に限ることではない。西欧世界にも類似の信仰が存在する。例えばバルト海周辺に伝わるクラバウターマン (Klabautermann) は一種の船霊であり、木の精霊であった存在が、その木が船建造に使われたことにより船の精霊に転化する、という考え方は、タイのメー・ヤー・ナーン信仰に近い。欧州を含めた広い範囲で船霊信仰の文化圏を議論する前に、以下まず船霊信仰について整理するところから始めたい。

2. 船霊信仰とは

「船霊」とは、船に宿る精霊のことで、日本においても漁民の間で古代から信仰されている航海安全と豊漁の守護神である（楠本 1993：207）。船霊は時化や災難、風や大漁を「鈴虫が泣くような音」で船人に知らせると言われる（川崎 1984：336）。日本における船霊研究は、民俗学を中心に昭和初期から始まり、日本各地の漁村で、盛んにその実態調査がなされてきた。

よく知られた「船霊」信仰は「御神体（男女一對の人形、サイコロ、髪の毛、五穀、古銭）」を帆柱を支えるツツに作った小さな穴に埋め込む（神野善治 2000：130）。地方によっては、船主の家に「船霊様」を祀ることもある（野口 1972：251）また、日本の「船霊」は一般的に女神と考えられており、女神の嫉妬を恐れるため、漁船は女性の乗船を嫌うという伝承がある。また、御神体としての髪の毛の採取、儀礼の担い手として女兒を重要視する地域も多い。

鹿児島を中心とした九州の民俗について研究する下野敏見は、船魂信仰は、青森県から鹿児島県の吐噶喇列島の間に存在する信仰であるとし、女性が男性の航海を守るというのが船魂信仰の核心であると述べている（下野 2005a：312）。吐噶喇列島以南の沖縄地方に船魂信仰が存在しないのは、沖縄にはすでに生活全般において「女の霊力によって男性が守られる」というウナリガミ信仰が貫徹しているため、敢えて船魂を祀る必要はないからだという（下野 同上）。つまり下

野によると、船魂信仰とは、ウナリガミ信仰に基づく信仰とみなされるのである。

「昭和30年ごろまでの船魂様は、ほとんど決まった形になっていたのです。特に南九州地域では、数え歳7歳の女の子が夜中に、その前におばさんから教えられた通り、表の間に入って鉄で自分の髪を切り、用意された半紙に綺麗におくのです。薩摩では紙雛をこしらえて子供に与えていましたが、あのような雛人形を作るのです。

少女の髪の毛を丸めて小指ぐらいにし、紙雛風に作るわけです。その長さはおよそ二寸五分から三寸ぐらい。それを男雛と女雛の二体作り、男のものは麻を使い、女のは黒髪を使うという例も見られます。こうして作った船魂を無言のままもらって、そして船の所に行きます。船大工は誰も見ていない所で一人、その船の帆柱の下の支柱の所に穴をあけて、そこに船魂を入れたのちふさいで、そして拝むのです。そのときに供える品物が櫛、口紅、



地図1：タイ・ミャンマー地図と調査地域（丸印）(Google Mapより)

鏡など、女性の化粧道具を中心に、神酒、餅、茶、米、塩、大豆などです。」(下野 2005：310)。

一方で、男神のイメージで捉えられる伝承もあり、船霊＝女神図式が定着している初期の「船霊」研究に対して、再度、多方面から検討する必要があるという意見も存在する(神野 2000：145)。しかし、船霊信仰の中に、こうした「女性の霊性」を特別視する信仰が存在することは間違いない。

この下野の定義する「女性が男性の航海を守る」信仰を前提とした船霊信仰は、後述

するタイの「メー・ヤー・ナーン」信仰にも共通する。他方ミャンマー、特に東南部アンダマン海沿岸では、船霊を「ウー・シンジー」と呼ばれる男性ナツであるとしていることは以前の論文で述べた（関 2015：157）。それでは、ミャンマーの船霊信仰は、日本やタイの船霊信仰とは異なるタイプであると考えて良いのだろうか。そもそも、東南アジアにおいて、その精霊信仰と精霊信仰における女性の役割は、東南アジアを東南アジアせしめる重要な文化的特徴である（リード 2002：221）、こうした日本における「女性の霊性」と比較研究する意味は大きいと筆者は考える。同様にミャンマーの船霊信仰についても、そこに女性の霊性は全く存在しないのかについて再度検討する必要がある。

以下、タイとミャンマーの船霊信仰について比較しつつ考察する。対象となる地域は、タイ南部およびミャンマー東南部である（地図1）。タイでは、2009～2012年にかけて南部の中心であるナコン・シータンマラート県、ならびにミャンマーと国境を接するラノーン県での聞き取りを実施した。ミャンマーにおいては、ラノーンの対岸となるコータウン、および、サルウィーン川の河口に広がるモーラマインにおいて、2013～2016年に聞き取り調査を実施した。また、モーラマインとコータウンの中間地点に位置するダウェーとベイにおいても、同期間内に若干の聞き取り調査を行った。

3. タイにおけるメー・ヤー・ナーン（船霊）信仰

タイは、その国民の9割が上座部仏教を信仰するという「仏教国」であるが、現在でも多くの民間信仰（精霊信仰）が根強く存在する。「ピーー」と呼ばれる数々の「霊的な」存在の他、大地の女神であるメー・トラニー信仰はその代表例の一つであり、また、家の敷地内に建てられるチャオ・ティー（屋敷神）、サーン・プラブーム（バラモン教神の祠）などもよく知られるところであるが、多くの信仰は、仏教と深く混じり合い、存在している。

メー・ヤー・ナーンとは「船に宿る精霊」いわば「船霊」である。船を水難事故から守り、豊漁を導くとされる。メー・ヤー・ナーンを信仰する船は、その船首に色鮮やかな布（通常3色か5色）を巻き、マリーゴールドの花を飾る。河川交通を含め、中部タイでも見られる信仰であるが、特にタイ南部の船の舳先を飾る

目立つメー・ヤー・ナン飾りは南部の象徴としてしばしば観光パンフレット等にとりあげられる(写真1)。

メー・ヤー・ナン信仰は、タイ南部だけではなく、運河を利用した水路交通が盛んであった中部の住民や、東部の沿岸部漁民や・船乗りの間でも古くから信仰されてきた。陸路交通が主たる輸送手段である現代では、トラックやバス等の運転手を職業とする人々の間にも信仰が広がっている(写真2)。

メーとは「母」を意味し、ヤーは「父方の祖母」、ナンは「既婚女性」を表すが、必ずしも高齢や既婚の女性がイメージされているわけではなく、「女性の精霊」であること以外に言葉にはあまり意味がないようである。インフォーマントへの聞き取りではメー・ヤー・ナンを若い未婚女性とイメージするケースが多かった。観音像のようにパターン化した姿の神像が存在するわけではないが、メー・ヤー・ナンはタイの伝統的衣装を身にまとった、髪の長い美しい未婚女性のイメージなのだそう。なぜ若い未婚女性かというメー・ヤー・ナンは優しい神様だからである。⁽⁴⁾

魚群探知機もない時代、一度大洋に乗り出すと漁民が頼れるのは、メー・ヤー・ナンだけだった。漁民はみなメー・ヤー・ナンを畏怖していたので、悪人ですら他人の船は絶対に盗まなかったという。漁業の技術進歩著しい現代においても、多くの漁民はメー・ヤー・ナンを信仰している。信仰する漁民や船乗りたちは、幸運、安全、豊漁などを願ってメー・ヤー・ナンへの儀礼を欠かさない。新しく船を作る・購入する時はもちろん、出航・出漁前にも必ず儀礼を行う。

メー・ヤー・ナン信仰は、タイ古来の木の精霊への信仰が土台にあるという説がある。樹齢の古い巨木には、「ナン・マイ(木の女精霊)」が宿ると考えら



写真1：船の船首部分に飾られたメー・ヤー・ナン(ラノン県にて)



写真2：車に飾られたメー・ヤー・ナン(バックミラーに吊るされた花輪)

れており、若く美しい女性の姿をしていると言う。タイの民間信仰では、日本と同様に、神聖視される樹木を他の木々から区別し、その霊性を保護するために、布が巻かれることが多い。色とりどりの布が巻かれたり、僧侶の袈裟と同じ黄色の布が使われる。

代表的な木の精霊ナーン・マイには、「ナーン・タキアン」と「ナーン・ターニー」がある。「ナーン・ターニー」は、幹が太く早く成長するターニー種のバナナの木に宿る精霊で、緑の腰巻スカートをはき、髪が長い、若く美しい女性の姿をしている。人に厄災を与える怖い精霊ではないというが、夜になると若い男性を誘惑し誘いこむために現れる、という説もある。ナーン・ターニーに魅入られた男性は精力を吸い取られ、次第に痩せて死んでしまうという。そのため、昔の人々は、ターニー種のバナナを屋敷地の中に植えることを好まなかった。

他方、タキアン木は硬木で大木になりやすく樹齢の長い木でもあるため、木の精が宿る木として信仰の対象になった。そのため、タイ人は今でもタキアン木を住居用の建築材として用いることを好まない。ナーン・タキアンは獰猛な女の精霊であり、怒ると人間を食い殺すこともあるからである。しかし、もし樹齢の長いタキアン木を伐採する必要がある時は、伐採者は、ナーン・タキアンの許しを得る儀式を行わなければならなかった。

しかし、ナーン・タキアンは、丁寧に供養してくれる人間には大きな利益を与えてくれる。人々がナーン・タキアンを頼る願い事の多くは、宝くじの当選番号透視など現世的な内容が多く、願いがかなった場合は御礼として女性のドレスをプレゼントする。このタキアン木を船材料に用いることが多かったので、この「ナーン・タキアン」と呼ばれた木の精がそのまま船に宿ってメー・ヤー・ナーンになったと考える説がある (Riabrieng 1994; 87)。しかし、現在の木船は必ずしもタキアン木で作られるわけではない。

メー・ヤー・ナーン儀礼は通常、早朝に行われる。儀礼を行う際、船の持ち主は舳先をきれいに



写真3：神木化したタキアン木。供物台が設けられ、またお礼参りにきた人々が送ったチュット・タイ（女性用礼服）が枝に吊るされている。

清掃し、綿糸あるいは赤い布を舳先に巻き付ける。さらに香水を振りかけ、金箔を貼り、花飾りを巻く。そして舳先に祭壇をもうける。この祭壇に、豚の頭、鶏、果物、菓子、線香、爆竹、紙製の金銀といった、メー・ヤー・ナンへの供物が備えられる (Riabrieng 1994: 88)。線香が消えるまで待ち、供物が捧げられ、全員で祈る。次に椰子の実の汁を船尾や帆柱に振りかける。最後に爆竹を鳴らし、紙製の金銀に火をつけ、海中に投げ入れて儀式は終了する (前掲書)。タイ南部、ナコンシータンマラート県における筆者のインタビューによると、メー・ヤー・ナン儀礼には、まず、花、ろうそく、線香、食べ物などが供えられる。場合によっては僧侶が招かれ、パーリ語の呪文を唱え、儀礼は終了する。

このようなメー・ヤー・ナンへの供儀が行われるのは、船の出港、仏日、中国正月、ソクラーン正月、船を新たに購入した時などである。儀礼を司るのは、中部では「タイコン (船頭)」であるが、船の持ち主が行うこともある。また、船を作るために新たに木を切り倒すときにも許可を求めるためにメー・ヤー・ナンの祠の前で、船へのメー・ヤー・ナンの招魂儀礼が行われる (前掲書)。

筆者はかつて、タイ南部のムスリム集落においても、このメー・ヤー・ナン信仰が存在すると述べた (関 2014: 149-157)。特に、仏教徒とムスリムが混住する諸県 (ナコンシータンマラート、ラノー) においては、「メー・ヤー・ナン」は宗教を超えた漁民の信仰の対象である。ムスリム、少数民族である漂海民 (しばしばクリスチャン) の関係なく、「メー・ヤー・ナン」を知らない漁民は存在しない。

マレー半島に住み着いた南タイ人は、古くから漁業や海洋交易を生業としており、その生活はメー・ヤー・ナン信仰と深く関わっている。供養しないと暴風雨に見舞われると言い伝えられ、もし、供養しない船で海に出て海難事故に遭った場合、漁民たちは「やはりメー・ヤー・ナンの供養をしなかったからだ」と考えるという。南部のメー・ヤー・ナン儀礼は、2月の中国正月 (トルック・チーン) になされることが多いため、元々は中国系住民の信仰が、タイ人漁民の間に広まったという説もある。しかし後述するように、同様の形式で執り行われる船霊儀礼は、対岸のミャンマー領の漁民や、両国にまたがる漂海民にも見られるため、船霊信仰はもっと以前からこの地に存在したと考えるほうが自然であろう。あるインフォーマントが述べていたように、船主が華僑系であることが多いため、

船主が決めた休日に儀礼を行うようになった、という説のほうが信ぴょう性が高い。

ムスリム漁民の船霊儀礼も、かつては仏教徒と同じ内容の儀礼を行っていたという。しかし、最近ではイスラーム復興運動の影響もあり、おおっぴらに供養を行うことは少なくなっている。メー・ヤー・ナーンを信仰しているムスリム漁民の場合、仏教徒と同じではなく、できるだけ「イスラーム風」に儀礼を行うという。中国正月ではなく、自分たちの暦により決めた吉日にメー・ヤー・ナーンへ儀礼を行い、儀礼を司るのはイマーム、儀礼の中心はコーランの暗唱という形式をとる。

ナコン・シータンマラート県の仏教徒、イスラーム教徒（以下「ムスリム」と記述）混住地区に住む船大工W氏への聞き取りによると、同地でのメー・ヤー・ナーン儀礼は、僧侶（仏教徒の場合）もしくはイマーム（ムスリムの場合）を招くこともあるが、船主や船頭および関係者だけで行われる場合が多い。ただし、船頭が臨席する場合、中部タイでのメー・ヤー・ナーン供養のように特別な役割がある訳ではない。主催者はあくまでも船の所有者である。仏教徒、ムスリム、双方共に船霊を「メー・ヤー・ナーン」と呼び習わし信仰している。メー・ヤー・ナーン儀礼を行う前に、占い師に吉日を占ってもらう。ただし、仏教徒はワン・プラ（仏日）でも船を出す、ムスリムは金曜日が吉日でも絶対船を出さない。また、仏教徒の場合、船にナム・モン（聖水）をふりかけるが、ムスリムは黄色いもち米を用意し、それを撒く。一般的にムスリムの方が儀礼は簡素である。また、仏教徒であっても、中部に比べると、南部のメー・ヤー・ナーン儀礼は簡素で短い。儀礼終了後、午前9時に出航するのが一般的である。

仏教徒とムスリムの漁民が混住する地域では、船の元の所有者と現所有者の宗教が異なる場合も発生する。例えば、ある船の最初の所有者がムスリムで、最初のメー・ヤー・ナーン儀礼をイスラーム式に行った場合、次の所有者が仏教徒であっても、彼のメー・ヤー・ナーン儀礼はイスラーム式で行わなければならない。他方、前所有者が仏教徒の船をムスリムが購入した場合、イスラーム風の儀礼を行うのは構わない。また、ムスリムの船はコーン（船首部分）を長くする。仏教徒は長いコーンを好まない、もしムスリムの船を購入した場合、コーンを短く切ってしまう。しかし、切り取ったコーンを家に置いておくのは「不吉」とさ

れるので、切った部分は、寺に持っていく。ムスリムのメー・ヤー・ナーンは、仏教徒と異なり、花輪を飾ることがなく、布の色数が少ないといわれるが、ナコン・シータンマラート県におけるムスリム居住地域の一つであるターサーラー郡漁村で見かけた船はいずれも、多色の色布が巻かれており、コーンの長さ以外に違いは見られない⁽⁵⁾。

ラノン県の仏教徒・ムスリム混住地域では、仏教徒の女性がムスリムの男性と結婚して改宗するケースも多く、そのためムスリム集落とはいえ仏教への理解も深く、ムスリムとしての宗教実践はかなり柔軟であった。ただ、ムスリム住民側からみると、仏教徒は精霊信仰が生活の一部となっているが、自分たちはそれほど精霊信仰への強いこだわりはないという。ムスリムであるS氏も漁民として必要に応じて自分の船の上でメー・ヤー・ナーン儀礼を行うが、儀礼は非常に簡素なものであると強調する。イマームを呼んできて船上でコーランを読むという形式をとり、その後、舳先に布を巻き、参加者全員で共食を行う。巻く布は多くても3色であり、線香の代わりにカンマヤーン（松脂）が焚かれる。しかし、S氏は、メー・ヤー・ナーン信仰は若い世代のムスリム漁民の間では、衰退していくだろうと述べていた。

「タブリーグ」活動に象徴されるイスラーム復興運動の影響はタイ南部ムスリムの信仰の「純化」を促すものとなっている。そのため、ムスリムの船霊儀礼は、仏教徒と比べると「簡素」であり、イマームの招聘などイスラーム的解釈が付加されている。また、このような精霊信仰儀礼自体を嫌悪する風潮も出始めている。しかし、船霊信仰は、タイ南部にムスリム漁民の間に広範囲に広がっている。小河久志はマレーシア国境に近い南部トラン県のムスリム集落の船霊信仰について、以下のように述べている。

「船霊とは女性の精霊で、漁の安全や漁獲の多寡をつかさどるとされる。一般に船霊の宿る船首部（huarua）を踏んだり、船内で下品な言葉を使うことは、船霊の機嫌を損ねる行為とされ慎まれる。漁民はまた、漁の成功を願い、新船進水式や船補修（年1～2度）の終了日、新漁開始前日、漁具購入時や大漁時、逆に不漁の場合などでも船霊の機嫌をとるため頻りに儀礼を行う。」（小河 2005：5）。

小河によると、この集落でのメー・ヤー・ナーン儀礼は、色布の新しいものへ

の交換、香水 (namhom) の船全体へのふりかけ (右回り)、松脂の焚きつけ、共食、そしてイスラームの知識を持つ村人によるドゥアーの詠唱そして最後に、再度呪文を唱えながら揚げた米 (khaotok) を船首部に投げつけて終了する (小河 2005 : 5)。また、小河の調査地では、仏教徒コミュニティでよく見かけるサーイシンと呼ばれる綿糸で作られた紐を、子供の手首や腰、首に巻きつける習慣がある。悪霊や病気から守るために手首に糸を巻く。仏教徒の間では、よく見られる魔除けの行為であるが、この集落のムスリムにとっても、紐を巻くという行為は、子供への厄除けとして行われるという (小河 2005 : 5)。祈りの対象は、先祖霊や土地神、アッラー神とそれぞれであるという。

タイ南部における精霊信仰と宗教との関係は「森」よりもずっと制御不可能な「海」という「異界」と対峙する生活である。この厄介な「海」という異界の存在があるからゆえ、タイ仏教の中心地の一つである「ナコン・シータンマラート」と東南アジアにおけるイスラーム普及の中心地となった「パッタニー」に挟まれ、仏教徒とムスリムに分化した民が、それぞれの「大伝統」との関わりで宗教実践を行ってきただけでなく、相互に影響を及ぼしある時は一つの家族の中に仏教、イスラーム、バラモン、精霊信仰が交じり合う形で宗教コスモスを形成し、とどまることなく変化にさらされて来たのではないだろうか。

4. ミャンマー東南部における船霊信仰

筆者は、ミャンマー東南部の沿岸地域における船霊信仰についても、数年にわたり継続調査を行ってきた。前述したタイのラノー県は、狭い海峡を経て、ミャンマー領コータウン (Kawthaung) と向い合っており、近年、ミャンマーとの交易が盛んな地域でもある (地図1参照)。ラノーの港には、ミャンマー側と行き来する客を乗せた船や漁船が行き来する。これらの船にも船霊信仰を表す布が巻かれている。コータウンの漁民社会でも船霊信仰は盛んである。船霊は船首に宿るとされ、布を巻くことで船霊への畏怖を表現する。タイ漁民同様、船首部分に布を巻き船霊への畏怖を表現する。しかし、コータウンの住民はこの船霊を「ウー・シンジー」と呼ぶ。ウー・シンジーは、ビルマ族に親しまれた非常に有名なナツ (男神) ⁽⁷⁾ である。厳密に言うと「船霊」というよりは、海に風をもた

らす霊的な存在であるが、漁民たちの信仰は深く、漁に出る・出港前などに海上での安全を祈って船首に米で作った菓子や干したキンマなどを備え、ウー・シンジーの魂を呼び出す儀礼を行う。タイ同様、船首に布を巻くが、一緒にフトモ草を備える場合もある。漁民、船乗りにおけるウー・シンジー信仰は、東南部に限らず、ヤンゴンを含むミャンマー全土の沿海部漁民・船乗りの間に広く普及している。タイにおけるメー・ヤー・ナーン信仰と同様である。布を巻けるような触先のない形の船の場合は、船首部分に花を飾り、出港前に必ずウー・シンジーへの儀礼を行うという。

ミャンマーでは、内陸部にも同様の「船霊」信仰が存在する。エイヤーワーディー川沿いに住むバガンの漁民は、ガンジーシンという一組の男女の精霊を船霊として信仰している。二人は兄と妹であり、地域住民は、船（最近では自動車も）を購入した際は、ガンジーシンの祠に報告し、供物を供える。ガンジーシン信仰もやはり船首部分への船飾りによって示されるが、飾りは上下二重になっており、上の部分は仏教信仰、紅白二色の布を巻いた下の部分は、ガンジーシンへの信仰を表すと言う。古くなった巻き布は川に捨てるか、ガンジーシンの祠の周囲の木に巻いておく。

このようなミャンマーにおける2つの「船霊」の併存であるが、ミャンマー人は「イエーガンパイン・ウー・シンジー（ウー・シンジーは海水を治める）」という言葉で説明する。つまり、海上での船霊は「ウー・シンジー」であり、河川上での船霊は「ガンジーシン」というナツ神の住み分けがあるという。

さて、このコータウンの船霊であるが、序章で述べた下野の「女性が男性の航海を守るというのが船魂信仰」という定義に照らし合わせると、やや異なる印象を受ける。触先に飾る布は、タイと同様であるが、船霊が男性であるということは、違う原理に基づいた信仰とみなすべきなのであろうか。この点について論じる前に、まずコータウンの位置するミャンマー東南部の歴史文化的背景を知る必要がある。

コータウンを含むミャンマー東南部（現・タニンダーイー管区）は、ミャンマーの周縁的地域に位置し、タイとミャンマーが歴史的にその領有を争った地域でもある。ゆえにその文化的背景は複雑である。地図1を見てもあきらかなように、ミャンマーの中心地ヤンゴンから遠く、他方、タイとは長い国境線を存するこの

地域は、ミャンマーよりタイとの関係が深い。元々は、ダウエー人と呼ばれる先住民、モーン族、カレン族、タイ族の漁民が混じりあって住んでいた。11世紀頃からパガン朝（ミャンマー）、その後13世紀より16世紀頃までは、スコタイ・アユタヤ朝（タイ）の勢力圏に入っていた。16世紀後半、ミャンマー中央部ではトゥンゲー朝が興り、それにより再びミャンマーの影響下におかれる。トゥンゲー朝の衰退と共にアユタヤ（タイ）の影響下に戻り、18世紀に入ると、タイ、ミャンマーそれぞれの王朝の隆盛に伴い、めまぐるしく支配者が変わる。つまり、タニンダーイーは、タイのチャオプラヤー川流域やタイ湾からベンガル湾への出口に位置するため、エイヤーワディー川流域やチャオプラヤー流域に成立した内陸大政権が、交易利権をめぐる支配権を争った地なのである（伊藤 2011：31－32）。1765年、コンバウン王朝（ミャンマー）は、この地域の支配権を完全に握るが、第一次英緬戦争（1824-1826）での敗北により、モーラミヤインと共に英国に割譲される。当時のタニンダーイーは、人口希薄の自給自足的農業に頼る地であり、英国はチーク林以外大した経済的価値はないとみなしていた。（Hall 1987：657）。そして1948年、ビルマ連邦としての独立により、再度正式にミャンマー連邦共和国の領土となった。ミャンマー最南端に位置するコータウンは、第一次英緬戦争後、英国統治下の貿易港ビクトリア・ポイントとして栄え、英国の植民地政策に基づき中国系やタイ人、マレー・ムスリム等が移住してきた。このような都市成立の背景ゆえに現在でも民族構成は多様である。

以上のことから、ミャンマー東南部は、地域によりミャンマー文化の影響に濃淡はあるにせよ、王都からはるか遠くに位置し、ビルマ文化の影響も限定的であったことがうかがわれよう。他方でタイ文化とのつながりを考慮する必要がある。ミャンマー東南部の船霊信仰は、この地域におけるタイ、ミャンマー、土着的といった複数の伝統文化の交錯の中で発達した。ゆえに、ウー・シンジーというエイヤーワディー河周辺のビルマ族に信仰されたナッグがタニンダーイー管区でも船霊とみなされるようになったのは、ビルマ（ミャンマー）文化の本格的な受容が進行した18世紀後半以降と考えることもできる。

タニンダーイー管区の北辺に隣接するのが、モーン州である。モーン州は、主としてモーン族が住む地域である。モーン族は、ミャンマー南部の先住民の1つであり、古代から東南アジア大陸部における海洋民として知られる。州都はモー

ラミヤインである（地図1）。サルウィーン川河口に拓けたこの町は、第一次英緬戦争終了時に英国に割譲され、その後第二次英緬戦争時まで、英領ビルマの首都となり、「リトル・イングランド」と呼ばれたほど大きな英国人のコロニーが存在した。

英国統治時代に作られた整然と区画された町並みは、現在でも、ミャンマーの他の都市とは異なった独特の趣がある。また、英国統治期に、同じく英領となっていたインドから大量の移民がやってきた。現在でも、こうしたインド系住民やムスリムが住むコミュニティが市内に点在する。

しかし、モーラミヤインは、タニンダーイー管区に比べるとその開発の歴史は古い。現在のミャンマーにおけるモーン族文化の中心はこのモーラミヤインであるが、ドヴァラヴァティ時代から数えると、海洋民として知られるモーン族は、ヤンゴン周辺からタイ西部、中央部にかけての広い範囲をその文化圏としていたのである。

このモーラミヤインの港に寄港する漁民の間でも船霊信仰は存在する（写真4）。船の舳先に白と赤の布を巻き、その下に「船霊」を祀っている。



写真4：モーラミヤインの船霊

この船に乗り組んでいる漁民たちによると、モーラミヤイン周辺の族漁民独特の船霊信仰であり、「船霊」は若い独身の女性で「マシナー」と呼ばれる⁽⁹⁾。漁民は、10

月に漁を始めるが、その際に、18歳以上の若い独身の男女がマシナーへの供物を供える役割を担う。供物は主に若い女性が喜びそうな装飾品である（写真5および6）。それから線香をあげ、ジュースを供える。

船に乗っている間は朝と夕方、このマシナーに白米、料理、水を供える。但し、豚肉と牛肉を好まないで、それ以外の料理を供える。若い女性の神様なので、若い男性の船乗りがお気に入りである。彼女のお気に入りになれば、夢に現れ良いことを特別に教えてくれるという。

日本の船霊信仰においても、船霊が若い水夫の夢枕に立ち、遭難を告げるとい

うという（関山 2005：92）。また、漁民たちは船霊だけではなく、同時に神仏も船に祀るのが普通である。それは伊雑宮であったり、金比羅さんであったり、エビス神であったりする。自分たちが信仰する漁業の神・海を守る神仏である。壱岐・対馬の山の頂には、村人の氏神ではなく、航海業者や漁業者の神が祀ってあった（関山 2005：170）。また、信仰する神仏により禁忌も発生する。例えば、金毘羅さんを信仰する船乗りはカニを食べない（関山 2005：208）モーラマインのマシンマー信仰は、このように日本の船霊信仰との共通点を多く持っている。

舳先に巻いた布が古くなると、町のポーボーギー⁽¹⁰⁾の祠に納めに行くが、行かない人もいる。ウー・シンジーも信仰しているが、それは船室の中に飾っている（写真7）。

この「マシンマー」信仰から、モーラマインの漁民が船霊とウー・シンジーを別のものとして捉えていることが分かる。船霊は若い女性であり、ウー・シンジーは他の神々と共に、海が荒れるのを防ぐ。同じ海にかかわる神ではあるが、船霊ではないという。こうしたモーラマイン漁民の船と航海に関する信仰には、やはり「女性が男性の航海（船）を守る」という原理が存在



写真5：マシンマーのために船首に供えられた日用品。衣服、手鏡、アクセサリー、日傘等を大きなタッパーウェアに入れて甲板の船首部分に置いておく。



写真6：マシンマーのためにもう一つ用意されていたタッパーウェアの中身。下着やアクセサリー、マニキュア、リップクリームなど。



写真7：船室内。仏壇の他、ウー・シンジー画や、海に風をもたらすとされるシン・ウパゴ像が飾られている。

することがうかがわれる。モーン族漁民にとって、ウー・シンジーはエイヤークディー河沿いのビルマ族の神である。海にまつわる伝承を持つため漁民に信仰されるが、船霊とは異なる存在として別々の場所に祀られている。

このようなモーラミヤインの事例を元に、タニンダーイー管区の南端コータウンに見られる船霊の名称を見直すと、モーラミヤインのように、別々に祀られていた船霊と、ビルマ族のもたらしたウー・シンジー信仰が混ざりあった結果生まれた名称である可能性がある。もし、このような仮説が妥当であるならば、やはりミャンマーの船霊信仰にも「女性が男性の航海を守る」という原理があると考えられるのではないだろうか。

タイでは、船中にメー・ヤー・ナーンのみが祀られるが、同時に海を守る神として観音信仰も存在する。ミャンマーでは、船霊とは別に、船内に仏像が置かれることも多く、前述のように、船室にウー・シンジーが飾られる例もある。船霊に加え、信仰の篤い神仏にも頼るといふ船乗りたちの「異界＝海」への畏怖の感覚は日本と変わらないといえる。

結論

序論で定義した「女性が男性の航海を守る」信仰としての船霊信仰は、タイ、ミャンマー両国における海・河川沿いの漁民、船を扱う職業の人々の間に広範囲に存在する。日本の船霊信仰に関する比較文化論は、東アジアに限定して考察されることが多いが、こうした東南アジアにおける同様な船霊信仰の存在は、このタイプの船霊信仰がより広い範囲に存在することを示唆する。

ミャンマー、タニンダーイー管区における船霊は男神「ウー・シンジー」と呼ばれるが、前述のように、タニンダーイー管区は最後にビルマ化された地域であり、タイ・マレーの船霊文化が先に存在し、ミャンマー内陸文化に基づくナツ神名は後から付加された可能性がある。他方、古くから海との関わりが深いモーン族漁民は、船霊を「マシマー」という若い女性であるとし、ウー・シンジーとは異なる存在と認知している。前述のコータウンはムスリム人口の多い都市（約60%）である。ムスリム漁民もやはり船霊を信じているが、彼らは船霊を「ウー・シンジー」とは呼ばない。

「ナツ」と呼ばれるミャンマーの精霊に対する信仰は、タイの「ピー」信仰とは異なる道を歩んできた。ミャンマーにおける「ナツ」は、タイよりもより公式的な形で仏教と結びついている。ミャンマーのナツは、37の「大ナツ（公式ナツ）」、その他の有名なナツ、土地神、地域の守護霊、村の守護霊、木の精、水の精や少数民族のナツ等複雑に分化し、ナツ儀礼の様式化も進んでいる。そもそもこの大ナツは、バガン王朝のアノーヤター王が、仏教を浸透させるために、庶民の間に存在する無数のナツとそれに対する信仰を整理／管理し、公式ナツとして37のナツを「指定」したことに端を発する。乱暴な言い方をすれば、ミャンマーにおける精霊信仰の「国家ライセンス」化である。公式ナツの中には、アノーヤター王時代の王家出身の人物も含まれている。つまり、この37の公式ナツは、仏教の浸透政策の下、征服された周辺の異民族へのビルマ族の「ナツ」の押し付けの側面があり、また彼らに対するビルマ族の優位性を示す象徴にもなってきたとも考えられる。また、地域や寺院の「鎮守」ともいえるポーポーギー信仰や、過酷な修行を経て超人的な能力を獲得した「ウェイザー」と呼ばれる人々への信仰は、仏教信仰ともナツ信仰ともいえない中間的な存在である。タイ同様に、「ナツ」も仏教の優越性の下で習合し変容してきたが、このような「ナツ」の「ランキング」が図られたことが、タイとミャンマーの精霊信仰における大きな違いであろう。つまり、少数民族固有のナツを除くと、主要なナツの名称であればそれだけ大きな威信を有するとみなされる。船霊信仰にはこうした「神の統合」が存在するように思われる。

他方、タイにおける精霊信仰に対する扱いはどのようなものであったであろうか。津村は、近代国家形成期のタイで仏教の「近代化」が図られ、仏教の卓越に伴う呪術的信仰の相対的な弱体化のみならず国家の側から積極的に呪術的信仰を制限する動きがあったと述べている（津村 2002：37）。また1930年代以降、タイ東北部で輩出された専門的祈禱師「モー・タム」は従来の「モー・ピー」と呼ばれる呪術師と明確に概念的区別がなされ、前者は仏法（タム）の力に依存するのに対し、後者は力の厳選を精霊の呪力に依存するとし、仏法を背後に主張することで呪的サービスを提供した（津村 2002：37）。つまり、近代国家形成期にタイは、仏教の教義としての「純化」を目指し、そのプロセスの中で、呪術を含む精霊信仰を周縁化させていったのである。

タイの船霊「メー・ヤー・ナーン」が古代から、その名称で呼ばれていたのか、については議論の余地がある。しかし、タイという国家が、いかなる形においても、「精霊（ピーー）」信仰のパトロンになったり、タイ族化を目指して公式なピーーを指定する、という政策を行うことはなかった。タイ（仏教）にとって、精霊信仰は制限されるべき対象であったからである。しかし船霊信仰は、やや特殊な扱いを受けていたきらいがある。なぜなら、大きな商船や軍隊においても「メー・ヤー・ナーン」と呼ばれる船霊信仰が続けられてきたからである。ゆえに「メー・ヤー・ナーン」は地域・宗教を超えた船霊呼称として、タイに君臨してきたと考えられる。

「女性が男性の航海を守る」信仰としての船霊信仰は、日本、タイ、ミャンマーそれぞれに基層文化として根付いている。しかし、かつては同じ文化圏に属したであろうタイ南部・ミャンマー東南部の船霊信仰は、国民国家化した時代に反応し、中心文化の受容と共に変化し続ける。「船霊」の性別や名称が変化し、巻いた布や長い船首などの象徴に異なる解釈が付加される。海が「異界」である限り、漁民や船乗りの神頼みは続くであろう。しかし、現代の精霊信仰は「国民国家」化の流れに逆らえないことを示唆しているように思われる。

本論文は、科学研究費補助金（基盤研究B）「東アジアにおける宗教的シンクレティズムの社会的研究—日本・中国・東南アジア」（研究代表者・関泰子）により2016年2月20日-26日にかけてミャンマーにて実施されたフィールド調査に基づく。また、タイ調査に関しては「アジアにおける精霊信仰の近代の変容—ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響—」（平成21年度～23年度科学研究費補助金（基盤研究（B））研究代表者・関泰子）による調査に基づく。

注

- (1) 「船魂」と表記されることもある。本論文では原則として「船霊」を用いるが、引用する文献に「船魂」と記載されている場合は、そのま「船魂」表記を用いる。
- (2) 拙稿、2012「タイにおける船霊信仰—南タイを中心に—」『社会学研究科紀要』(10) 47-65、ならびに2014「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』26 (4)、143-166参照。
- (3) 中・南部に住む仏教徒タイ人は、屋敷地に「チャオ・ティー」と「サーン・プラプーム」を

並列して建てることが多い。その場合、「サーン・ブラブーム」の方を少し高くする。土地神である「チャオ・ティー」に対し、バラモン教由来の「サーン・ブラブーム」は土地神を押さえ、監督する「鎮守神」と見なされていると考えられるが、チャオ・ティーの代わりに「ター・ヤーイ」と呼ばれる先祖霊を祀ることもある。

- (4) 他方、神が「年老いた女性」の場合、性格が荒々しくなると言う。
- (5) 木村によると、ナコン・シータンマラート県ムアン郡のターサーラー村周辺のムスリムは、現マレーシア、ケダ州から連れてこられたムスリムの最初の居住地であり、その後、同県内の他の郡へと移住していった（木村・松本 2005：90）
- (6) 本論文では、国名は「ミャンマー」に統一し、特定のエスニック・グループを示す場合には「ビルマ」の名称を用いる。
- (7) ミャンマーには、「ナツ (nat)」と呼ばれる、仏教と習合した精霊信仰が存在する。その起源は古く、古代より現代にいたるまで土着信仰として民衆の中に深く根付いている。いけばタイにおける「ピー」に相当するが、ミャンマーにおけるナツ信仰は、ビルマ族支配層による統合と「リスト化」・ランク付けが、数度にわたって行われ、その結果ナツ間の階層化が進行すると同時に、その信仰が「ビルマ化」を伴いながら全土に普及していた（関 2015：1）。
ウー・シンジーは、エイヤーワディー川流域のビルマ族固有のナツである。ミャンマーのナツは、それぞれ典型的なイメージとして実体化している点がタイのピーと対照的であり、ウー・シンジーは、ビルマ族の伝統的衣装に身を包み、堅琴を抱えた美しい青年として描かれる。海神に好かれ、乗船中の船を海神から守るために、自ら海に身を投じたという伝説から、船霊信仰の「祭神」として祀り上げられたと考えられる。
- (8) 2016年2月23日、モーラミヤインにてインタビュー。
- (9) 「マシンマー」は若い女性であると言うが、モーラミヤインの漁民によると「マシンマー」という語は夫が妻を呼ぶ時に使われた古い言葉であるという。
- (10) ボーボーギー (Bo Bo Gyi) とは、ミャンマーの精霊において守護神的な役割を果たす神である。「曾祖父」を意味するボーボーギーという言葉通り、神像は高齢の男性の姿で表される。一般のナツより格が高いとされ、寺院やパゴダを守る神として建てられることが多いが、東南部の都市では、町（あるいは地区）を守る守護霊として祀られている。その地を開拓した実在の人々がボーボーギーとして祀られている事例もある。日本で言うところの「鎮守神」的な存在であると考えられる。

参考文献

〈日本語文献〉

- 伊東利勝編 (2011) 『ミャンマー概説』 めこん。
- 小河久志 (2005) 「現代タイ国におけるイスラーム実践の変動に関する人類学的研究—イスラーム復興運動「Tabligh」と国家宗教制度、精霊信仰の相互関係から—」(庭野平和財団 平成17年度研究助成報告書) 1-8。
- 川崎晃稔 (1984) 「船霊と刳舟」日本民俗研究大系編集委員会編『日本民俗研究大系』5、國學院大學、335-355。
- 木村正人、松本光太郎 (2005) 「イスラーム地域としての中国とタイ (2)」『コミュニケーション科学』(22)、81-112。
- 楠本正 (1993) 『玄界の漁撈民俗—労働・くらし・海の神々—』海鳥社。
- 下野敏見 (2005a) 『南九州の伝統文化—祭礼と芸能、歴史』南方新社。
- — (2005b) 『南九州の伝統文化—民具と民俗、研究』南方新社。
- 関 泰子 (2014) 「タイ南部の船霊信仰」『立命館国際研究』26-4 (143-166)。
- — (2016) 「現代ミャンマー社会における精霊信仰と「公式ナツ」をめぐる言説」『論集』148、1-30。
- 関山守彌 (2005) 『日本の海の幽霊・妖怪』中公文庫。
- 津村文彦 (2002) 「ナーン・ナークの語るもの—タイ近代国家形成期の仏教と精霊信仰—」『アジア経済』XLIII-1、25-43。
- 野口武徳 (1972) 「南島の船霊信仰」古野清人教授古希記念会編『現代諸民族の宗教と文化—社会人類学的研究—』社会思想社、249-267。
- 野地恒有 (2008) 『漁民の世界—「海洋性」で見る日本』講談社。
- 橋本卓、橋本 (関) 泰子 (2012) 「タイ南部・ミャンマー東南部における船霊信仰—「メー・ヤー・ナーン」と「ウー・シンジー」、『アジアにおける精霊信仰の近代の変容—ジェンダー・地域・エスニシティに及ぼす影響—』(平成21年度～23年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書: 研究代表者・橋本 (関) 泰子)、49-66。
- 橋本 (関) 泰子 (2012) 「タイにおける船霊信仰—南タイを中心に—」『社会学研究科紀要』(10) 47-65。
- 林行夫 (1993) 「モータムと「呪術的仏教」—東北タイ・ドンデーン村におけるクン・プラタ

ム信仰を中心にー」安中章夫編『東南アジアー政治・社会（地域研究シリーズ 第6巻）』所収、日本貿易振興機構アジア経済研究所、256-292。

- リード、アンソニー、平野秀秋・田中優子訳（2002）『大航海時代の東南アジアI』法政大学出版局。

<英語文献>

- D. G. E. Hall (1987) *A History of South-east Asia*. London: Macmillan.
- Tambiah, S. J (1970) *Buddhism and the Spirit Cults in North-east Thailand*, London: Cambridge University Press.

<タイ語文献>

- Thapani Riabrieng (2006 [1994]) *Phithikam lae khwamchua thongthin*, Bangkok.